

取組 1 ダイバーシティ研究環境整備強化

① 研究支援員の配置

広島大学に所属する研究者が、妊娠・育児・介護により研究時間の確保が困難になった際に、研究者の指示の下に研究補助業務に従事する研究支援員を配置し、研究とライフイベントの両立を推進することを目的として2017(平成29)年度から支援を開始した。

<対象者>

広島大学と雇用契約を結び、広島大学を主たる研究の場としている大学教員(教授、准教授、講師、助教、助手)及びフルタイム勤務の教育研究系契約職員(特任教員、寄附講座等教員、共同研究講座等教員、病院助教、外国人研究員、研究員、特別研究員、病院診療医に限る)のうち、申請理由①～③のいずれかに該当し、かつ申請要件をすべて満たす者。

<申請理由及び要件>

理由 ①～③のいずれか

- ①妊娠:妊娠中
- ②育児:12歳に達する日以後最初の3月31日までの子を養育している
- ③介護:介護認定(要支援認定含む)を受けている父母その他家族を申請者自身が主として介護している

要件 (a)～(c)を全て満たす者

- (a)産前産後休暇、育児休業、介護休業その他休業・休職中でない者
- (b)配偶者が原則フルタイムで勤務している者、単身者又は配偶者のいない者
以下は、申請者が男性の場合のみ
- (c)配偶者が、大学、大学共同利用機関又は独立行政法人等で研究者としてフルタイムで勤務している者(補足)研究者とは、研究を行うことが主たる業務として雇用されている者です。

<支援実績>

支援実績としては、2017(平成29)年11月～2018(平成30)年3月まで13名で内訳は右表のとおりである。申請理由は、全員「②育児」であった。

内訳

	教授	准教授	助教	その他(研究員)
男性	0名	1名	0名	0名
女性	0名	4名	7名	1名

<利用者の声(抜粋)>

●理系教員:女性

支援員業務内容 蛍光免疫染色の手法を用いて、神経障害性疼痛モデルマウスにおける脳ミクログリアの機能解析、マウスの行動薬理学実験結果のビデオ解析

業務内容に対する評価 期待通りに実験、データの解析業務を行ってもらい、論文作成に向けて大きく貢献してくれた。

研究推進における効果 本制度を利用したことで、現在、投稿準備中の論文に関する実験を大幅に進めることができた。また、研究室の後輩に実験の指導や、実験手技を引き継ぐためのプロトコールやマニュアル等を作成してくれたので、今後の研究進展にも、大きく貢献してくれた。

●支援員:男性(M2生)

従事した感想 自身の業務を通じて、微力ながらも制度申請者の研究活動とライフイベントの両立の手助けができたのではと感じている。本制度があることがきっかけとなって、より協力体制が円滑に進んだと実感した。

自身の研究や進路における影響 得られた実験データやその後の予定を立てる際、制度申請者と密に連携をとる必要があったことから、報告・連絡・相談の大切さを改めて実感した。一人だけで進める実験と異なり、現在得られているデータの解析や今後の予定について、齟齬のないように実験を進めていくのは大変であったが、今後研究活動を行っていく上で良い経験となった。

② 病後児保育利用料補助事業

広島大学の職員の子(6歳に達する日以降の最初の3月31日までの間にある子。)が病気や怪我の回復期にあるため集団保育が困難な期間について、病後児保育施設を利用した場合の利用料の補助を行っている。具体的には、病後児保育施設を利用した際に支払った費用について、利用料の3分の2を越えない額(10円未満切り捨て)と1,000円のいずれか低い額を、利用料補助として大学から半期ごと、前期(4月1日～9月30日)、後期(10月1日～3月31日)、それぞれ計8回まで支援している。

<利用者の声(抜粋)>

- いつ保育園から電話がかかってくるかとヒヤヒヤしながら仕事をする必要がなくなるので、落ち着いて業務に専念できます。
- 申請の手間も少なく利用しやすい。制度があることで支援されている気持ちになる。
- 大変ありがたいです。具合の悪い子どもとは一緒に過ごしたいですが、授業を休講にすると、補講を組むのがとても大変なため、休講にしないで済むのがありがたいです。遠方から親に来てもらうより費用負担がはるかに少なく済みます。

③ 休暇期間中の学童保育

広島大学の構成員の就業と家庭生活の両立支援を目的として、小学校の長期休業中(春季・夏季・冬季)に、東広島地区(東広島キャンパス)と広島地区(霞キャンパス)で学童保育(子どもクラブ)を開設している。業者委託により、指導員(委託業者)と学生サポーター(広島大学で教職課程を履修中の学生などを委託業者で雇用)で運営し、学内施設等での体験学習(春は登山、夏はザリガニ捕りや野菜収穫、冬はしめ縄づくりなど)や学習支援、屋内・屋外運動支援などを行い、本学学生の実習の場にもなっている。

<実施内容>

	東広島地区(東広島キャンパス)	広島地区(霞キャンパス)
春季 子ども クラブ	期間 2017(平成29)年3月27日～ 4月6日(平日8:00～19:00) 保育 実績 本学教職員の学童21名 (新小学校1年生から6年生[卒業生も含む])	期間 2017(平成29)年3月23日～ 4月6日(平日8:00～19:00) 保育 実績 本学教職員の学童34名 (新小学校1年生から6年生[卒業生も含む])
夏季 子ども クラブ	期間 2017(平成29)年7月21日～ 8月29日(平日8:00～19:00) ※ただし、8月10日～8月15日を除く 保育 実績 本学教職員の学童41名 (小学校1年生から6年生)	期間 2017(平成29)年7月21日～ 8月30日(平日8:00～19:00) 保育 実績 本学教職員の学童44名 (小学校1年生から6年生)
冬季 子ども クラブ	期間 2017(平成29)年12月25日～ 2018(平成30)年1月5日(平日8:00～19:00) 保育 実績 本学教職員の学童17名 (小学校1年生から6年生)	期間 2017(平成29)年12月25日～ 2018(平成30)年1月5日(平日8:00～19:00) 保育 実績 本学教職員の学童26名 (小学校1年生から6年生)

<利用者の声(抜粋)>

- 今回もとても助かりました。是非、今後も続けていただくと助かります。(保護者)
- 子供が毎日いろいろとできごとを話してくれ、とても楽しそうでした。引き続きよろしくお願ひしたいと思います。(保護者)
- 久しぶりに保育園のお友達と会えて、楽しかった。(学童)
- 体育館・外遊び・虫取りがとても楽しかった。また、博物館にもたくさん行って面白かった。(学童)

④ 第9回中国四国男女共同参画シンポジウムの開催

- 日時: 2017(平成29)年11月17日(金)13:00~16:30
- 場所: 広島大学学士会館レセプションホール(東広島キャンパス)
- テーマ: 平和で持続可能な社会づくりにおける男女共同参画
- 参加者: 95名(中国四国地区の国立大学の男女共同参画に携わる教職員, ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)事業の共同実施機関の方, 本学学生, 一般の方)

■ スケジュール:

● オープニング・講演

開会挨拶: 宮谷 真人(広島大学理事・副学長(教育・東千田担当))

来賓挨拶: 高垣 広徳(広島県副知事)

伊藤 賢(文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室長)

基調講演: 相田 美砂子 広島大学理事・副学長(大学改革担当)

「広島大学の長期ビジョンと男女共同参画」

特別講演: 堂本 暁子 男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表(元千葉県知事)

「女性の参画と持続可能な社会: 東日本大震災に学ぶ」

● パネルディスカッション

事例① 「女性防災士の役割と学生防災リーダーの育成」

二神 透 愛媛大学社会連携推進機構防災情報研究センター副センター長,
社会共創学部准教授

事例② 「男女共同参画の視点での防災ネットワークづくり」

信政 ちえ子 広島市男女共同参画推進センターセンター長

事例③ 「多様性・ジェンダーの視点からの災害リスク削減: JICAの取組を中心に」

田中 由美子 国連ウィメン日本協会理事/元JICA国際協力専門員

事例④ 「男女共同参画: マツダの事例」

木村 泰之 マツダ株式会社R&D技術管理本部開発管理部 部長

○コメンテーター 堂本 暁子

○コーディネーター 石田 洋子 広島大学副理事(男女共同参画担当),
男女共同参画推進室長,
教育開発国際協力研究センター教授

本シンポジウムは、広島大学とマツダ(株)、デルタ工業(株)、国際開発センターの協力で実施した。全体テーマは広島大学の長期ビジョンSPLENDOR PLANに沿って「平和で持続可能な社会づくりにおける男女共同参画」とし、広島大学の相田美砂子理事・副学長の基調講演に引き続き、元千葉県知事で男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表の堂本暁子氏に特別講演をいただいた。また、パネルディスカッションは「女性の参画と持続可能な社会づくりに向けて」をテーマに4名のパネリストからの事例発表を軸に防災における男女共同参画の視点や持続可能な社会づくりについての有益な情報交流の場となった。

<参加者の声(抜粋)>

- 持続可能な社会のためには、法や制度などの整備とともに動物としての人間からのまなざしがかせない。女性は双方のバランスをとる能力に優るところが大きく、その視点をしっかりと取り入れることが持続可能な社会づくりの要だと改めて思った。
- テーマ設定が良く、災害・防災・復興を男女共同参画の視点で考えることの重要性について認識を新たにした。
- 大学の男女共同参画シンポジウムと言えば、女性研究者を増やす取組に終始することが多いが、持続可能な社会や防災の視点からのアプローチは新鮮でよかった。
- マツダの取組事例はとても良いと思いました。
- SDGsに関して認識をあらためた。
- 常日頃から女性が意見を言うこと、声を上げることが大切だと思います。私も誰かが言ってくれるのを待つのではなく、意見を言う機会を積極的に作っていききたいと思います。



相田美砂子理事・副学長 基調講演



堂本暁子氏 特別講演



パネルディスカッション

5 アメリカ・ボストンでの好事例にかかる調査

■ 日時: 2017(平成29)年12月18日(月)~12月25日(月)

■ 場所: アメリカ合衆国ボストン

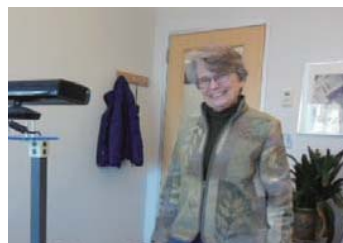
■ 調査機関: 国際開発センター

■ 調査(インタビュー)対象者: マサチューセッツ工科大学, ハーバード大学, ボストン大学, ノースイースタン大学の4大学で、特にSTEM分野の学生や教員の男女共同参画・多様化を推進する責任者, また裾野を広げる目的で実施されている女性高校生対象のサマープログラムの責任者, 等を含む合計9名(全員女性)

大学	名前	学部	役職
マサチューセッツ工科大学	Dr. N. Hopkins	理学部	教授(元教員多様化委員会委員長)
	Dr. H. Sive	理学部	教授(元理学部副学部長)
	Dr. H. Sive	Women's Technology Program(女性高校生対象の工学系サマープログラム)の責任者	
	Dr. B. J. Hughey	WTPの副責任者	
ハーバード大学	Dr. J. Singer	Senior Vice Provost for Faculty Development & Diversity(教員多様化の責任者)	
ボストン大学	Dr. L. E. Hyman	医学部	Associate Provost
	Dr. J. Wong	ARROWS(学内の女性STEM分野研究者ネットワーク)代表, 工学部教授	
	Dr. S. Grace	SRROWSメンバー, 工学部准教授	
ノースイースタン大学	Dr. D. Hodgkin	コンピューター情報科学部	副学部長

■ 調査内容: 各大学のSTEM分野における男女共同参画・多様化の状況, 取り組み内容, 成果, 課題等

- 調査結果: ● マサチューセッツ工科大学は, 1996年から2011年の間に, 特に理学部と工学部の女性教員数を倍以上に増やしたり, 学部長, 学科長等の上位職に女性教員を登用することに成果を上げた。一方, ハーバード大学は, 2008年から2017年の間に, 女性だけでなくマイノリティの教員を増やすことに一定の成果を上げた。
- マサチューセッツ工科大学およびハーバード大学が特に力を入れたのが, 学長直轄で女性教員の増数, 女性教員の上位職(学部長, 学科長等)への登用を推進する組織体制づくりで, 男女共同参画・多様化の重要性を各採用担当委員長やメンバーに徹底するべく, 新しい採用基準を作成したり, 無意識の偏見(unconscious bias)を取り除くための研修等が実施されていた。
 - ボストン大学やノースイースタン大学も含め, インタビューを行った大学は, 常にジェンダー差別にさらされている若手の女性研究者に自信をつけ, 勇気づけるためにメンター制の充実, 女性研究者ネットワークの強化, さらにすそ野を広げる目的で女子高校生を対象とするサマープログラムの実施にも力を入れていた。



Dr. D. Hodgkin



Dr. L. E. Hyman



Dr. N. Hopkins



Dr. J. Singer